

# 『JAPAN REVIEW』 NO. 3 (1992年刊) 掲載論文

## 幻想の力：三島由紀夫『サド侯爵夫人』

ミコワイ・メラノヴィッチ

**要旨：**正常の男と女の心のなかに存在する神秘（不可解性）と狂気が三島由紀夫の『サド侯爵夫人』の主要問題であると私は考える。サド侯爵と三島という両作家は、人間の醜悪と禁断とされるものを受けとめ、深遠な真実を暴露し、人間の暗黙の要求に答えて表現したのである。

この小論の目的は新劇展開と関わる三島の主な現代劇を考察しながら、幻想という問題を、文学創造の重要な要因として考える。三島由紀夫の世界に対する態度にもまた幻想を追求することができる。戯曲『サド侯爵夫人』の主人公であるレネーという名前のサド侯爵夫人は幻想を現実とみなして、長年の監禁のあとで、刑務所から家に帰ろうとした現実の夫、すなわちサド侯爵を、引き受けず会いもせず、自分自身の生涯の転換期に夫を拒絶しなければならなかった。その時点まで彼女はスキャンダラスな夫に対してずっと献身的な態度を守り抜いていたのだが、夫がやっと自由になったとき修道院に自らを預けることにしてしまうのである。サド侯爵夫人の決心の理由は謎に包まれている。その謎を解こうとしたのが三島であった。いったい何がおこったのか。その疑問に対して解答を試みながら、芸術の本質を探ることになる。

## インドに於ける俳句

ワルマ・サトヤブシャン

**要旨：**インドではそれぞれの言語はそれぞれの豊かな文学的伝統を持っている。多くの古い詩型は短くて俳句に近い。現代インドでは俳句についてますます関心が高まっている。俳句に興味を持った多くの詩人たちは俳句を自分の言語に翻訳して、自分の言葉で俳句のような短い詩を書き始めることさえた。五・七・五音数の形式で書かれたものはみんな俳句と名づけられている。本書の中で私はインドの言葉で書かれている俳句を紹介する。

## 最も荘厳な僧院とその他の名所：エンゲルベルト・ケンペルの日本画

ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー

**要旨：**ドイツの博物学者のエンゲルベルト・ケンペル（1651—1716）はオランダ東インド会社、長崎商館付きの医師として元禄三年（1690）九月から元禄五年十月まで日本に滞在した。その二年の間に膨大な研究資料を集めるとともに多くの挿絵を描いた。また様々な本、地図、美術品、道具を購入した。ケンペルが日本から持ち帰った物には五十枚の名所絵も含まれていた。本論文の目的は、ケンペルの知恩院と方広寺の大仏の記述によって、これらの名所絵の特徴と

美術史上の位置を検討することである。

## チェコスロヴァキアと日本の初期の文化交流について

### —主な書物と人物の研究—

(第一次世界大戦まで)

カレル・フィアラ

**要旨：**本研究は、各分野の始点を中心として、初期交流史の特徴を探る試みである。日本に関する文献には、マルコ・ポーロ旅行記のチェコ語訳（約1400年頃）と天正遣欧使節による献上文書のチェコ語訳（1585年）があり、またチェコに関わりの深い者として、1622年に長崎で火刑にされた宣教師カロロ・スピノーラを挙げることができる。一方、定説とは異なり、宣教師ヴェンセスラス・パンタレオン・キルヴィツァーは実際には入国できず、マカオで没したことが明らかになった。また、18世紀に渡日したベニョフスキーをスロヴァキア民族の者と見る。19世紀になると、オーストリアの日本学者アウグスト・プフィツマイヤーがボヘミア出身で、ボヘミアと密接な関係を維持していた。明治期に日本を訪れた者にはホロウハ、ヴラース、スヴォイスィーク、エリヤージュヴァー、ハヴラサなどがいて、日本に関する知識を熱心に収集していた。20世紀の初期、画家オルリック、そして実業家ホラ（現・大阪ガス社の供給部長）とレツル（現・原爆ドームの設計者）の在日中の活躍が注目に値する。また、1918年共和国成立直前、後に大統領となったマサリックの訪日、そして彼の、日本政府との会談の結果を踏まえた日本・チェコスロヴァキア両国間の協力の背景が興味深い。本論はこれらの事実に関する資料を紹介し、定説を見なおしている。

## 日本拡大家族のエコロジー

黒須里美

**要旨：**本稿の目的は見過ごされている現代日本の家族構造の地域的差異に注目し、拡大家族の地域性の要因を明らかにすることにある。データとして国勢調査に基づく資料を利用した。前半では、半世紀にわたる人口変動と共に国レベル、県レベルにおける家族構造の変化を探った。この分析に見る数値のパターンは、家族研究者によっていわゆる東北型家族、西南型家族と従来から呼ばれてきたものと一致している。後半ではこの地域性の要因を判明すべく、47の都道府県を分析単位として数量分析を試みた。人口、経済、文化的特徴の違いによって拡大家族の地域性を説明するモデルをつくり重回帰分析を実行した。地域に残る家意識や家屋の大きさは拡大家族形成を助長し、反対に家族に代わる地域の福祉は拡大家族の割合を低下させるという結果を含め、このモデルによって85% ( $R^2$ ) が説明された。明治民法以前からの地方慣習のなごりと戦後の経済成長による激しい社会・人口移動の影響によって、家族変動のプロセスも現在の家族構造も地域によってかなり違っていることが明らかになった。

## 市民にとっての恥の意識—調査データにもとづいて

ポーリン・ケント

**要旨：**ルース・ベネディクトが日本社会を「恥の文化」という概念で説明してから、学問の世界だけではなく、一般の人々にとってもそれはなじみが深く、日本および日本人を語る際のキー・コンセプトとなっている。私は、最近の政界におけるスキャンダルをめぐるマスコミの報道においてもしばしば「恥」という言葉でもって政治家の行動が批判されるのを見聞きし、興味深く感じた。

そこで、「恥」が政治的文脈の中で、市民にとってどのような意味を持つのかを調べることにした。周知のとおり、恥の文化に言及する研究は多いが、その概念を厳密に検討したものは少ない。さらに経験的にアプローチしたものはほんのわずかにすぎない。実際に、市民はどのように「恥」というものを認識しているのだろうか。その結果は従来の議論にどのような知見を加えてくれるだろうか。

1989年に行なわれた「地域社会の政治構造と政治意識の総合研究」の有権者調査の機会を利用し、最後に自由回答の形式で、1.「政治家としてどのような行動が最も恥ずべきだとあなたは思われますか。具体的に一つお教えください。」と2.「同じ市民の中ではどのような行動が恥ずべきだとあなたは思われますか。具体的に一つお教えください。」の質問を設定した。

分析にあたっては、まず二つの質問に対する回答を、次のようにそれぞれ5つに分類してみた。これは概念にもとづく分類ではなく、回答にあらわれた言葉や表現にもとづいて分けたものである。

### 《政治家として恥ずべき行動》

- 1) 権力・権威・地位の乱用
- 2) 政治家として期待される行動からはずれた行動
- 3) 市民に対する義務を果たさない場合
- 4) 自分の利益しか考えないこと
- 5) 金権・賄賂・汚職

### 《市民として恥ずべき行動》

- 1) 自他の権威・地位の利用
- 2) 法・規範・ルールの違反
- 3) 一般的な社会性に欠けていること
- 4) 地域や日常生活における不和
- 5) 自己中心主義・拝金主義

作田啓一は、恥に「公恥」と「羞恥」という二つのタイプが存在することを指摘しているが、上記の各カテゴリーは公恥に属するものと考えられるだろう。さらに、この調査が政治的な文脈において行なわれたため、政治家や行政、あるいは社会一般や生活の場としてのコミュニティに対する「公憤」も恥を媒介して現われている。このような恥の意識は、クロス集計を取ってみると、団体所属や友人ネットワークと相関が認められ、逆に職業、年齢、収入などによる違いはあまり認められなかった。すなわち、ここでの「恥」は身近な社会関係の中で「恥ずかしいからやるな」という社会的制裁として考えることができる。報告では上記の各カテゴリーの内容の検討と、他の要因との関係について論じている。

## 日本における自然人類学研究の現状

埴原和郎

**要旨：**人類学は「集団としてのヒトおよびその生産物と行動に関する科学」(A. L. Kroeber)と定義される。その一部である自然人類学は人類集団の進化(大進化と小進化)を解明することを最終目的とするが、人類進化にかかわる要因はきわめて複雑であるとともに、文化ならびに人間社会の成立に深く関与している。したがって自然人類学は他の人類学諸分野とともに人類そのもの、人類が作り出した有形、無形の文化、ならびに人類の生存と密接不離の関係にある環境を理解するための基本的知識を提供する科学であるといえる。

日本において自然人類学を専攻する研究者の数はきわめて少ないが、その活動は広範囲におよび、研究のレベルも国際的に高く評価されている。本総説ではこの分野の現状をごく簡単に紹介したが、とくにわが国の伝統ともいべき日本人の小進化に関する研究をやや詳しく述べた。これらの研究は単に日本人集団の起源や形成過程を明らかにするばかりでなく、人種の分岐や形成、あるいは環境への適応に関わる普遍的問題の解明にも貢献するもので、人類生存の展望に不可欠の基礎的知識を提供する。

この総説は人類学専攻の研究者というより、他分野の研究者への情報提供を目的としているので、詳しい研究内容にはふれていない。また研究項目についてもごく一部を紹介したに過ぎないが、日本における自然人類学研究の現状と傾向の大筋を理解して頂ければ幸いである。

終わりに、それぞれの分野に関する研究動向をご教示下さった方々に深くお礼を申し上げる。

この総説は1989年9月に、Liblice (Czechoslovakia) で開催された国際シンポジウム“Foundations of Different Approaches to the Study of Human Evolution”(Organizers: B. A. Sigmon and V. Leonovicova) で発表した“Japan and Human Evolutionary Research”の内容を書き改めたものである。